

西丸與一

法医学教室
の午後



朝日文庫

西丸與一（にしまる よいち）

昭和2年、東京生まれ。横浜医科大学卒業。
医学博士。現在、横浜市立大学医学部法医学
教室主任教授，医学部長。昭和30年から神奈
川県監察医。神奈川大学法学部講師。日本法
医学会理事，ほか。

法医学教室の午後

朝日文庫

1985年7月20日 第1刷発行

1989年9月10日 第12刷発行

著 者 西 丸 與 一

発 行 者 八 尋 舜 右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© Yoichi Nishimaru 1985 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

法医学教室の午後

西丸 與一

朝日文庫

目次

霧笛の夜	9
事件は水もの	19
名前のない子	29
偽装心中	38
美しい妹	48
生きとし生けるもの	57
事故死と病死	66
野暮な話と粹な人	73
苦い酒	83
約束	94

懐かしい人々 102

火葬場の予言者、南に行く 113

はにわりの人 124

死者からの手紙 133

戻ってきた事件 143

とかくお酒というものは 154

調子がくるう話 163

密輸エレジー 173

罪のない女 182

父と子の間で 192

Kの死 203

血を合わせる話 213

或る捜査 223

美しい業を見た 234

白い毒薬 246

推理小説と法医学の間で 256

高瀬舟 267

死とのむなしい対話 276

あとがき 289

文庫版のために 291

法医学教室の午後

霧笛の夜

夜にはいると、雨は少しおさまり、霧が出始めた。白っぽい幕が、静かに流れ動く。

港のほうで、何度も霧笛が鳴った。

こんなとき、医学部の二階にある私の部屋から窓越しに、ぼんやりと運河を眺めているのもよいものである。ネオンの色が、赤や青にくずれてにじみ、みんな美化されて、水面にでる無数の小さな輪は、その下にすべてをかくし、そして、沈めてしまうように見える。人間の社会もそうなのだろうか。

遠くから表面だけを見ていれば、すべて平和で、美しいのかもしれない。

夜霧の運河は、私をふとそんな感傷におとしいれる。

一階にある監察医務室から、遺体が到着したという連絡が入った。若い女性の死体である。『さあ、解剖だぞ』と自分に言いきかせて、煙草に火をつける。

また、死という現実と向い合うのである。助手のA君の部屋に声をかけて、私は暗い廊下

を、解剖室にむかって歩き出した。

——五月は末、細かい雨が絶え間なく降る日であった。

港に面した公園で、全身ずぶ濡れになって死亡している女性死体が発見され、とりあえず、遺体は、大学に向って搬送中という第一報が入っていた。

その女性は二十歳くらい。濡れた顔が若く美しかった。なぜ、死んだのであろうか。まず、死因を決める役目が私に回ってきた。

解剖室のライトの下で、照らし出された白い身体がまぶしかった。長い髪の毛が印象的である。静かな眠り、そんな言葉があてはまるような安らかさがあった。

解剖をしながら、当直の主任さんに聞いてみた。

「この人の身元はわかっているのですか」

「はい、割れたようです。本署のほうで親元に連絡をとりましたから、もうこっちに向っていると思います。所持品のハンドバッグに、手帳かなにかがあったらしいです」

「遺書は？」

「それはなかったようです。しかし、手帳になにか厭世的なことが書かれていたようです。私は現場に行っていないので、見てませんが、捜査のものが、そんなことを言っていました」

「独身ですか？」

「いやあ、それは分りません」

解剖に要した時間は、約二時間十五分であった。

結果として、薬物中毒死であることが判明した。多分催眠剤であろう。胃の中に白い粉末が多量にとけて、残っていた。自殺か、あるいは薬の飲み過ぎか、その辺については、まだ判然としない。化学検査の定量的な検査結果を待つことにする。

極端に多い量の催眠剤が検出されれば、やはり自殺と判断せざるを得ない。また、死亡している場所などからも、ある程度の推測はできるであろう。

これらの所見のほかには、外傷や、病氣らしいところは、どこにも見出されなかった。ただ各臓器にうっ血が強く、心臓や肺臓の表面には、小さな点状の出血点が、多数見出された。また、肺には薬で意識を失ってから発生したと推定される嚔下性肺炎の症状が顕著に認められる。そして、彼女は、まだ完全に独身であると言えた。

なんの薬を、どのくらい飲んだのか、それは化学検査を待たなければならない。いまは、とにかく、薬物中毒死ということである。

後の処置をA君に依頼して、私は解剖室を出た。例によって遺体を火埋葬するための書類を作成しなければならぬ。解剖中につけた捜査の主任さんが作ってくれた事件概況に目を通す。姓名、本籍、現住所などは、それぞれの欄に書き込まれていた。しかし、生年月

日の欄は空白であった。

「主任さん、この人の生年月日は分りませんか」と聞くと、

「それが、ちょっとはつきりしないんです。さっき本署で、父親と電話で話したのですが、なんだかはつきりしないんです。年は二十二歳だと言うんですが……」

「それじゃあ、あとでお父さんが来たら聞いてみましょう」

「それが先生、変なんですよ。二十二歳であることは、間違いないと言っているのですが、生年月日はよく分らないと言ってます」

「ほう！」

「とにかく遺体の確認もありますし、大学へ来てくれるように頼みました。もうそろそろ来ると思いますが、来ましたらもう一度聞いてみます」

私は生年月日がわからないということについて、あまり深く考えずに、書類を作成し始めた。

死体検案書、解剖報告書。それは死者のレポートである。

ちょうど書類が出来上がるころ、父親が到着した。白いものが混ざった髪を短く刈った、その父親の印象は、私がその娘の死体からいただいていたイメージとは、なにか喰い違っているように思えた。われわれの仕事は感情で動くべきではないと思うが、なぜかそう感じられたのであった。

遺体の確認を終えた父親が、再び監察医務室にもどってきた。

「お嬢さんに間違いありませんか」

「間違いありません。ご面倒をおかけしてすみませんでした。あんな死に方をしなくてもいいのに……」

と言って、眼がしらをおさえていた。

「ところで、お嬢さんの生年月日は、いつですか」

「わからなきゃ、いけないんでしょうか」

と少しおどおどした様子で答えた。

「いけないというわけではないのですが、書類を作るのに必要なのです」

「困っちゃったなあ、はつきり覚えていないんです」

「ああ、それならあとでも結構です。あるいは、いますぐにでも奥さんに電話をして聞いてみてくださいいますか」

私は、母親なら覚えているだろうと思ったのである。すると、その父親は、ぶっきらぼうに、「女房はいないんです」と答えた。そして、

「どこで、なにをやってるんですか……」

とつけ加えた。

「それはすみませんでした。嫌な事を聞いてしまいましたね」

「いや、いいですよ。昔のことですから……」

結局、生年月日は、その父親では分らなかった。とかく、男親というものは、なにもわからないものだと勝手に思ってみたが、やがてそれがまったく違う憶測であったことが、わかってきた。

それは、この娘さんが生まれたとき、出生の届けを出していなかったというのである。したがって、いつだったか、いまとなつては覚えていないということであつた。

それを聞いて、今度はわれわれのほうがあわてる番であつた。戦後、孤児になつた子供を引き取つた場合などに、生年月日が戦災のために不明であるというような例を聞いた事があるが、この場合は、それとも違つていた。

「出生届を出してないとする、この娘さんの籍はないわけですか」

「どうもそういうことになるように……」

私は、あきれるといふよりも、むしろ腹がたつてきた。捜査主任たちも、いささか頓狂な声を出して、

「おいおい、おやじさん。そりゃあ本当かい。しっかりしてくれよ。冗談じゃないんだから……」

としゃべり出した。

「なんで届けを出さなかったんだね。それじゃあ、娘さんがかわいそうじゃないか」

「へえ、すみません。女房はいなくなっちゃもうし、届けを出さなきゃあいけねえ、いけねえ」と思っているうちに、こうなっちゃったんで……」

私は、ただ啞然としていた。いけねえ、いけねえと思って二十二年間も！こんなことがあるのだろうか。私は思いついたことをつぎつぎと質問してみた。

それによると、小学校も中学校も卒業したというのだから、わからない。まず小学校のときであるが、『学齡期になったときは、毎日どうしようかと思っていた』そうである。近所の同じ年ごろの子供たちが、親にランドセルを買ってもらい、喜んでいるのを見て、この子も行きたいと言って、はしゃいでいたという。入学のときがきたのに、この子には通知が来なかった。それは、当然のことであろう。

しかし、小学校の入学は、父親の表現をかりると、『先生に頼みに行ったら、入れてくれた』そうである。私にはよくわからないが、父親がそう言うのだから多分事実なのであろう。どのように頼んだのかを聞いてみたが、あまり要領を得なかった。『なにしろ、ずいぶん前のことだから……』とか、『子供が、かわいそうだからと思って、一所懸命頼んだ』といった調子である。

そして、無事に小学校は卒業した。中学のときは、もっと簡単だったという。義務教育というシステムが、そうなのか、私にはなにか釈然としないものが残ってしまった。